INMP 通信 No. 34
2021 年 3 月

編集：安斎育郎、小島健太郎、山根和代
翻訳者：赤松敦子、大塚未希、寺沢京子、山本美穂子

International Network of Museums for Peace

追悼　アン･C･ケリング氏（1941～2021年）

今年 1 月 20 日にノルウェーのオスロで逝去したアン・セシリー・ケリング Anne Cecilie Kjelling 氏を偲んで、オスロ国際平和研究所(PRIO: Peace Research Institute Oslo)のリサーチ・プロフェッサーで所長も務めたステイン・トゥネスン Stein Tønneson 氏が PRIO の友人たちを代表して追悼文を寄せました。以下はその短縮版です(追悼文の原文はこちらをご覧下さい)。

****

1971 年から 2011 年までの 40 年間、アン･C･ケリング氏とノルウェー･ノーベル研究所図書館は一心同体でした。オスロを拠点とした平和･紛争･安全保障･国際関係の研究者や、その時期にノーベル研究所を訪れた人たちはおそらく誰もが、親切で熱心なアンの手助けを借りて、調べたいテーマにぴったりな文献や出版物を探し当てたことでしょう。やがて彼女は、来館者の研究テーマに魅了され、国際平和研究学会(IPRA: International Peace Research Association)の Peace History 部門に積極的に参加するようになりました。1995 年から 2005 年までは、PRIO の学術誌 *Security Dialogue* の書評編集者も務めました。

アンは、ノーベル研究所着任する以前は、ノルウェー国立図書館大学で学び、ニューヨーク公共図書館やノルウェー外務省を含む複数の図書館で経験を積み、司書としての素晴らしい能力を身につけていました。

INMP 新理事会役員の初会合（2007 年、ローマ）左から、Steve Fryburg 氏, Gerard Lössbroek 氏, 山根和代氏, Anne Kjelling 氏, Joyce Apsel 氏, 安斎育郎氏, Peter van den Dungen 氏, Iratxe Momoitio 氏（写真提供：Lucetta Sanguinetti 氏）

今の若い研究者には想像もつかないかもしれませんが、当時の研究者にとって、紙の本や雑誌はなくてはならないものでした。そのため、ノーベル研究所の充実した図書館は、世界中から訪れる研究者にとって非常に有用かつ重要な施設だったのです。冷戦中も冷戦後も、世界中に広い人脈を築いていたアンは、PRIO のベテランから若い研究者に至るまで、皆に頼られる情報ガイドのような存在でした。

****

上記の追悼文では、アンが 1992 年にブラッドフォードで開催された第 1 回国際平和博物館会議に始まり、その後ノーベル研究所を退職するまで 20 年近く、INMP の活動に密接かつ長期的に関わっていたことには言及されていません。第 1 回会議の参加者であり、ブラッドフォード平和博物館の理事長 Chair でもあるクライヴ・バレット Clive Barrett 博士は、次のような追悼文を INMP に寄せています。

****

アン・ケリングは、とても印象的な女性で、背筋がぴんと伸び、実直で堂々とした性格の持ち主でした。知的で、平和の歴史や平和博物館に精通しており、アルフレッド・ノーベルやノーベル平和賞のこと、そして歴代の平和賞受賞者について知り尽くした、世界的権威でした。ノーベル研究所の図書館司書として、将来のノーベル賞受賞者の可能性を思慮深く調査するなど、過去から現在進行中の平和にまつわる国際的な動向について、知らないことはほとんどありませんでした。歴史学者として、彼女は国際平和研究学会にも出席しました。

世界有数の平和図書館に身を置いていたアンは、平和博物館のコンセプトに深く傾倒し、平和に関する文書や遺品の収集・記録・保存に献身しました。スイスのルツェルンで最初の平和博物館が創設されてから 100 周年を記念する式典（2002 年）や、ハーグなどで開催された INMP の国際会議、INMP 執行委員会と諮問委員会の合同会議でも、彼女と一緒に参加したことを思い出します。私と同僚がオスロを訪れた際には、快くノーベル研究所を案内してくれました。ブラッドフォードの平和博物館は、アンが引退した後、彼女自身のノーベル賞記念品コレクションの受取人に選ばれたことを光栄に思っています。彼女が寄贈した品々、特に、受賞者たちの晩餐会で豪華に飾られたメニューは、私たちの展示にたびたび登場しています。

穏やかで優しく、一方で頭脳明晰なアンは、鋭い洞察力を持っており、彼女の意見は確かな知識に裏付けされていました。平和博物館のコミュニティはかけがえのない仲間を失いましたが、彼女と知り合えたことを光栄に思います。

Peter van den Dungen 氏, Anne Kjelling 氏, Arthur Eyffinger 氏, Ted Lollis 氏（写真提供：Loes Eyffinger 氏）

****

また、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン Peter van den Dungen 博士は次のように述べています。

****

私がノルウェーのノーベル研究所図書館を初めて訪れたのは 1970 年代のことでした。運が良ければ、ノーベル賞受賞者の公式写真が飾られたノルウェー・ノーベル委員会の会議室も見学することができました。しかし、そこで出会える魅力的な伝記や、勇気あふれる平和創造の物語の数々が、なぜ博物館で紹介されないのか、いつも不思議に思っていました。潜在的には、世界で最も刺激的で重要な博物館のひとつであると思います。しかも世界には多くの戦争博物館がある一方で、平和博物館はほとんどないのが現状ですから。このような博物館は、最初のノーベル平和賞から 100 周年を迎えた 2001 年に開設されると予想されていましたが、実際にはノルウェーがスウェーデンから独立して 100 周年を迎えた 2005 年になって、ようやくノーベル平和センターとして開設されました。

しかし、研究所の図書館やアーカイブには、アルフレッド・ノーベルの「平和のチャンピオン

champion of peace」の思想や業績を記録・解説したユニークで貴重なコレクションがあるのに、新しい公共教育施設は「博物館」という名称を使わず、遺品の収集や展示活動も行わないことが決定されたのは、アンと私にとって残念なことでした。1992 年にブラッドフォードで開催された第 1 回国際平和博物館会議に熱心に参加したアンは、それ以来、INMP の役員として尽力してきたのは自然なことでした。国際連盟博物館のあるジュネーブの国連図書館や、同市の国際赤十字・赤新月博物館などと並んで、ノルウェー・ノーベル研究所が当初から INMP の活動に協力的であったことから、設立間もない INMP に一定の評価が与えられたのです。アンが引退した後、彼女はノーベル平和センターの展示ディレクターであるリヴ・アストリッド・スヴェルドラップ Liv Astrid Sverdrup 氏を後任に指名しました。

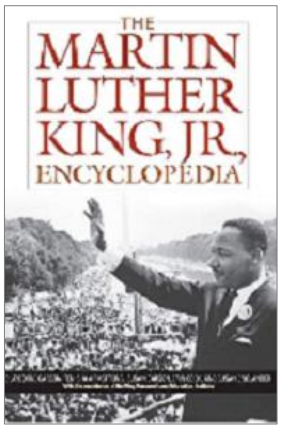
INMP の展示会 "Peace Philanthropy - Then and Now" が開催された 2013 年のハーグ市庁舎でのアン・ケリング氏（写真提供: Colin Archer 氏）

アンは、2013 年に INMP が平和宮 Peace Palace の 100 周年記念事業の一環としてオランダのハーグで開催したシンポジウムに参加しました。2ページに掲載されている写真は、ハーグで最も由緒ある建物であり、政府の所在地でもあるナイツホールで開催されたガラディナーの際に撮影されたものです。彼女は、国際司法裁判所の司書であるアーサー・アイフィンガーArthur Eyffinger 氏（Peace Palace にて執務）、エドワード（テッド）・ロリス Edward (Ted) Lollis 氏（今号に訃報が掲載されています）と一緒に写っています。

彼女の高い専門性と豊かな個性は、「平和の歴史」の研究者を惹きつけてやまず、なかでも米国やドイツで開かれた会議にはよく招待されていました。彼女の用意周到で何物にも代えがたい助言に謝意を表した本や論文は世界中に数え切れないほどあります。私はこの点でも彼女に大きな恩義を感じており、感謝と懐かしさをもって彼女を偲んでいます。本号では、アンへの追悼として、キング牧師とミハイル・ゴルバチョフ氏という2人の重要なノーベル平和賞受賞者に関するセンター・図書館・アーカイブを取り上げます。また、1911 年の受賞者であり、早くから平和博物館を提唱していた、アルフレート・H・フリード Alfred H. Fried も取り上げます。フリードは、アンが心から尊敬していたベルタ・フォン・ズットナー Bertha von Suttner のよき協働者でした。ズットナーは、アルフレッド・ノーベルの友人であり、そして、女性として1905 年に初めてノーベル平和賞を受賞しています。

キング・センター（アトランタ）及びキング・リサーチ＆教育研究所（スタンフォード）

1985 年、キング牧師の未亡人で、ジョージア州アトランタの M.L.キング非暴力社会変革センターの創設者兼会長であったコレッタ・スコット・キングは、スタンフォード大学の歴史家クレイボーン・カーソン Clayborne Carson 博士を M.L.キング文書プロジェクト M. L. King Papers Project のディレクターに招聘しました。



クレイボーン・カーソン他編『M.L.キング・ジュニア百科事典』

その主な目的は、キング牧師の重要な書簡・説教・スピーチ・出版物・未発表の原稿などの文書の決定版を出版することでした。『*M.L.キング・ジュニア文書 The Papers of M. L. King, Jr.*』全14巻として刊行予定で、その第一巻が1992年にカリフォルニア大学出版局 University of California Pressから出版されました。これは、キング牧師に関連する資料を世界中で探し、何百ものアーカイブや個人に連絡し協力を求めた成果です。最新の第七巻は2014年に出版されました。これらは必須の参考文献となり、キング牧師や、彼が世界中で影響を与えた多くの個人や運動に関する研究にも影響を与えています。

利用できる資料には、キング牧師が1963年8月28日のワシントン大行進 March on Washington for Jobs and Freedomで行った演説「I have a dream（こちらからアクセス）」や、1964年12月10日のオスロで行ったノーベル平和賞授賞式でのスピーチ（こちらからアクセス）も含まれています。

2005年、クレイボーン・カーソン博士は、スタンフォード大学に M.L.キング・ジュニア・リサーチ＆教育研究所 M. L. King. Jr. Research & Education Institute を設立しました。この研究所は、文書プロジェクトに恒久的な財政基盤を提供するとともに、キング牧師の先見性のある考えを広めるための幅広い教育活動を行うことを目的として

バーニス・A・キング博士
(写真：キング・センター)

います。同研究所のパンフレット（20ページ）はこちらからご覧になれます。

この文書プロジェクトから生まれたのが、2008年出版の『*M.L.キング・ジュニア百科事典 M. L. King. Jr. Encyclopaedia*』です。この百科事典は、文書プロジェクトのために行った広範な歴史的調査に基づいており、公民権運動に関わる人物・出来事・組織など約300の記事（アルファベット順に配列）が掲載されています。また、日を追った詳細な年表も含まれています。元々は書籍として出版されましたが、この百科事典はデジタル出版用に更新されており、こちらから自由にアクセスできます。

アトランタのキング・センターは、キング牧師夫人が設立し、娘バーニス・A・キング Bernice A. King 博士が代表を務めています。バーニス・キング博士は、キング夫妻が実践した非暴力を広めるため、世界中の若者や成人へ非暴力の原理を伝える教育活動を行っています。センターでは、さまざまな活動やプログラムを実施するとともに、非暴力に関する教育やトレーニングをオンラインでも提供しています。アトランタにあるキング・ライブラリー＆アーカイ

ブ King Library & Archives は、米国の公民権運動とその指導者に関する一次資料の最大の収蔵場所です。キング牧師の文書、彼が関わった組織の資料、そして運動で活躍した何人かの個人の文書があります。またアーカイブには、キング博士の教師・友人・家族・公民権運動関係者などへの 200 件以上のオーラルヒストリー・インタビューも収蔵されています。キング・センターの詳細は、こちらをご覧ください。

「Students with King」プログラム、次世代の教育・訓練（写真：キングセンター）

米国国家安全保障アーカイブが ミハイル・ゴルバチョフ 生誕 90 周年を祝福

3 月 2 日、ワシントン D.C.のアメリカ国家安全保障アーカイブ（NSA：National Security Archives）が、ミハイル・ゴルバチョフ Mikhail Gorbachev の 90 歳の誕生日を祝して、彼に関わるメムコン memcons など重要な資料を公開しました。

メムコンとは、会議で国家元首や政府首脳の間で交わされた個人的な非公式な会話などのメモで、歴史的な出来事の資料でもあります。研究者や歴史家にとって重要な資料で、かなり年月を経ないと手に入らないものです。

レイキャビク・サミット(1986 年)でのレーガンとゴルバチョフ
(Photo credit: Ronald Reagan Presidential Library)

NSA は、米国の慈善団体である平和基金会 The Fund for Peace, Inc.（https://fundforpeace.org/)のプロジェクトの一つとして設立された NGO で、ジャーナリストや学者によって、政府の機密を検証し、各関連機関と連携していくために設けられたアーカイブです。調査報道のセンター、国際問題の研究機関、機密解除文書の図書館の役割を担っています。ワシントン D.C のジョージ・ワシントン大学 George Washington University の中央図書館であるゲルマン図書館（Gelman Library)を

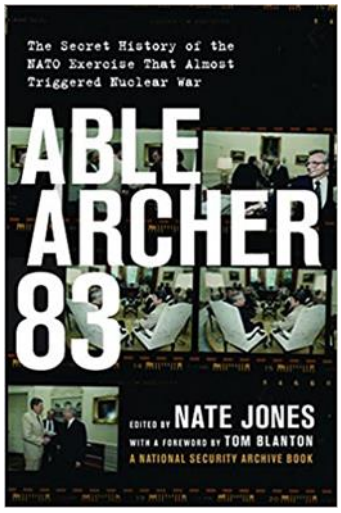
ジョージ・ワシントン大学キャンパスにある、装飾的門のゲルマン図書館

拠点としています。米国の情報自由法を活用する最前線の仕事を担い、その成果の多くは、オンラインを含む重要な出版物となっています。

NSA は、ゴルバチョフの生誕 90 年を記念して、「ゴルバチョフの偉大な成果」という項目を編纂しました。それは冷戦の終結、ソビエト体制の政治改革、全人類的価値に基づく世界像などの解明に役立つ資料です。ロシア語の文書と共に、今回公開された資料によって、地球規模での分断を終結し、壁が崩壊し、人びとが自由を謳歌し、欧州が「共通の家」をめざした 1980 年代後半から 1990 年代前半の奇跡なような時期を研究者などが再検討することを意図しています。ゴルバチョフは歴史を作っただけではなく、数十年続いた安全保障をめぐる対立や、それによる資料の制限から歴史を解放したのです。公職を去ってすぐに、ゴルバチョフは、ゴルバチョフ財団 Gorbachev Foundation を通じて、首脳会議の記録を公開し始めました。

ゴルバチョフは、首脳同士が直接会談することに価値があり、それによってお互いがもはや敵ではないと確信できると考えていました。とりわけ有名で重要な会談となったのは、「核戦争に勝者はいない、止めるべきだ」と宣言した 1985 年にスイス・ジュネーブで行なわれたレーガン大統領との会談です。更に、1986 年のアイスランドのレイキャビクでの会談では、共に核兵器を廃絶しようという夢に、かなり近づきました。

ゴルバチョフを 90 歳の誕生日を祝い、NSA は以下のような賛辞を送っています。「*彼の考えの多くを実現する時間はなかった・・・・・・しかし、ソビエト連邦のリーダーとしての 7 年間で、それ以前には誰も想像できなかった世界へと変えることができた。*



NSA が 2016 年に出版した Nate Jones 編『核戦争を引き起こしかけた NATO の隠された歴史 The secret history of the NATO exercise that almost triggered nuclear war』

冷戦に終止符を打ったのは正にゴルバチョフその人であり、そのことは語り継がなければならない」

今まで翻訳されなかった、ロシア語からの新しいメムコンなどはこのサイトで見ることができます。特別展のサイトはこちらです。またヴァーチャル読書室では、1868 年に遡って年代順に列挙された「機密」「極秘」「秘密」に区分された約 7000 もの文書が利用できます。これらの文書は、米国議会図書館 Library of Congress、米国文書館 National Archives、ロシア連邦文書館 State Archive of the Russian Federation、国連、赤十字国際委員会 International Committee of the Red Cross、常設仲裁裁判所 Permanent Court of Arbitration、国際司法裁判所 International Court of Justice など米国国内および海外の情報源から入手したものです。

アルフレート・H・フリート没後 100 周年:1921 年～2021 年

平和ジャーナリズムの先駆者であるアルフレート・H・フリート Alfred H. Fried は、オーストリア人として 2 人目（現在のところ最後）のノーベル平和賞（1911 年）受賞者です。フリートは、1905 年に女性初のノーベル平和賞を受賞したベルタ・フォン・ズットナーの親しい協力者でした。平和運動の熱心な記録者であった彼の数多くの出版物、特に百科事典のような『*Handbuch Der Friedensbewegung (Handbook of Peace Movement 平和運動便覧)*』（第 1 版 1905 年、第 2 版 1911～1913 年）は、第一次世界大戦前の平和運動と国際主義を研究する歴史家にとって、今日でも貴重な資料です。このことは、この種の出版物の中で最も重要なものとして広く知られていた、フリートが長年編集していた月刊誌『*Die Friedens-Warte (Peace Watch)*』についても同様です。

1921 年 5 月にウィーンで死去したフリートの没後 100 周年を記念して、平和運動の歴史に名を残した彼を追悼するいくつかの計画は、パンデミックにより中止となってしまいました。しかし、ここで、早くから平和博物館や展覧会を提唱してきたフリートの功績に敬意を表明します。フリートは、

1814 年クリスマスイブに行われたゲント条約の調印式。Sir Amédée Forestier による油彩画、1914 年（写真：スミソニアン・アメリカン美術館、ワシントン D.C.）

1902 年にスイスのルツェルンに開館した世界初の平和博物館の創設者ヤン・ブロッホ Jan Bloch にも協力していました。

『*Die Friedens-Warte*』の 1914 年 5 月号では、1812 年に戦争が終結し 1814 年のクリスマスイブにゲント（ガン）条約が締結された 100 周年を記念し、ニューヨーク市民が英米間の 100 年の平和を記念する平和博物館を作ることを決定したとフリートは報じています。ました。翌月の同誌では、「*フランクフルトで平和主義者の展覧会 A pacifist exhibition in Frankfurt*」と題した長いニュースを掲載しています。この展覧会は 1918 年に開催される予定で、その中心となるのが国際組織の活動を展示した「平和宮」（Peace Palace）でした。来場者は、国際協力の広範囲のさまざまな分野－現代の平和運動の基盤となるもので、フリートが運動への支援を呼びかけた―を理解することとなったでしょう。

通行人からは見えなくなったウィーンの B.V.ズットナーの記念プレート

アルフレート・H・フリート
（写真：ノーベル財団、ストックホルム）

同誌の7月号は、6月に亡くなったベルタ・フォン・ズットナーの追悼に捧げられています。フリートは、彼女に敬意を表するために、9 月にウィーンで開催される予定だった第 21 回万国平和会議の主催者の一人でした。しかし、彼女の死ではなく、第一次世界大戦の始まりにより、会議は中止となってしまいました。会議のプログラムには、「ズットナー博物館」という項目がありました。市の中心部にある彼女の住居（Zedlitzgasse 7 番地）を会議の参加者たちと訪ずれ、その後には、少なくともズットナーの書斎を彼女が残したままの状態で保存し、1 階は彼女のための博物館にしようという計画でした。

フリートは何度もこの計画に取り組みましたが、彼自身が早く亡くなったこともあり実現されませんでした。残念なことに、数年前の改修工事で、建物の正面にあったプレートが内部に移されてしまいました。そこには、「オーストリア平和協会の創設者であるベルタ・フォン・ズットナーがここに住み、活動していた」と書かれています。フォン・ズットナーの肖像は、オーストリアの 2 ユーロ硬貨に描かれていますが、彼女のメッセージ―「*武器を捨てよ！Lay Down Your Arms!*」－は、核兵器などの大量破壊兵器が全世界を脅かす時代になっても、実現できていません。

追悼　エドワード･W･(テッド) ロリス (1937-2020) 平和のモニュメント＆博物館の専門家

エドワード・W. テッド・ロリス Edward W. (Ted) Lollis が 12 月 20 日に米国テネシー州ノックスビルで他界したという哀しい知らせがありました。テッドは、複数の国々（特にアフリカ）に赴任した外交官であり、国務省でも様々な任務を担当しました。ロナルド・レーガン大統領時代の 1981 年には、メキシコのカンクンで開催された南北サミット North-South Summit の準備に尽力しました。南北問題を扱う最初で、そしてたった一回しか開催されなかったこのサミットのために、テッドはニューヨークやジュネーブで国連の国際発展戦略について交渉を重ねました。フランス・ボルドーの米国総領事館での仕事を最後に、1987 年に外交官を引退しました（詳細な情報はこのサイトで）。

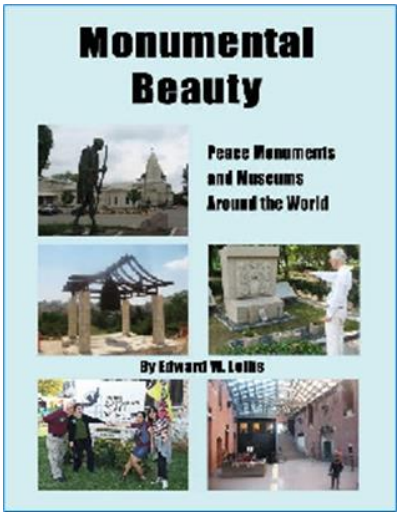
テッドは、歴史や地理に深い関心を持ち、退職後には平和のモニュメント Peace Monument の世界的権威の一人となりました。テッドのウェブ・サイトには、約 3000 ものモニュメントが紹介されています。この並外れた仕事は、資金力豊富な研究者チームの結果だと思われがちですが、実際はテッド自身によるものです。テッドは、新旧を問わず平和のモニュメントに関するさまざまな情報を集め、彼の関心を引いたものは、膨大なコレクションに加えていきました。

ハーグ市庁舎で(2013 年)、背景に平和宮の写真 (Photo credit: Colin Archer)

テッドは、2013 年にハーグの平和宮 100 周年の平和慈善事業の一環として平和宮で催された国際シンポジウムに招かれ、スピーチをしました。このシンポジウムは、INMP がオランダのカーネギー財団と協力して開催したものです（2013 年 5, 11 月の INMP ニュースレターNo.5,6 の記事をご覧ください）。平和宮は、世界で最も大規模で美しい平和のモニュメントの一つあると同時に、国際司法裁判所などの拠点として現在も活動の場となっています。テッドは、その機を利用して『*Monumental beauty: peace monuments and museums around the world 歴史的に価値のある美:世界の平和のモニュメントと博物館*』を出版しました。これは、平和のモニュメントの美しさや多様性、そこに込められている意味を明らかにした最初の本で、70 か国から 400 以上のモニュメントと博物館を紹介し、古代から現在まで年代順に並べています。解説を添えたモニュメントのカラーのイラストは、眺めているだけでも楽しませてくれます。

また、テッドは、国・テーマ・年ごとにモニュメントを整理したサイトを開設しています。このニュースレターの読者には、彼が作成したリスト「33 のカテゴリーに分類した 510 の平和のための博物館」が特に関心を引くことでしょう。これに関しては、山根和代・安斎育郎編『世界における平和のための博物館 Museum for Peace Worldwide』の 2020 年版の出版と関連して、ニュースレターで紹介しています(2020 年 9 月の INMP ニュースレターNo.32 の 17～18 頁)。サイトでは、モニュメントや博物館だけでなく、約 1500 人の卓越した p－スメーカーの伝記や、200 年以上にわたる 150 の国際平和会議の情報を年代順にイラスト付で列挙しています。

また、テッドは『*Oxford International Encyclopedia of Peace オックスフォード国際平和事典*』(Nigel J. Young 編, 2010)で「平和のモニュメント」の項目を執筆しました。豊富なイラスト付で、ウェブサイトからも観ることができるようになっています。彼のサイトは、膨大で多岐にわたる内容で、アルファベット順にテーマ別の目次があるため検索もし易く、600 の他のサイトとのリンクが付いています。テッドは、バーチャルな世界の平和百科事典を作り出しており、これは世界中の多くの人々に、情報や励まし、楽しみを与え続けていくでしょう。テッドの娘シンシア・ロリス Cynthia Lollis は、父親のために、この素晴らしいサイトを今後も継続していくことを決意しています。



ヴォルフゼック平和博物館（最初のオーストリア平和博物館）

ヴォルフスゼック Wolfsegg にある平和博物館（最初のオーストリア平和博物館 The First Austrian Peace Museum）は、1993 年にフランツ・ドイッチェ Franz Deutsch 氏よって設立されました。2009 年にフランツ・ドイッチェ氏が亡くなってからは、ヨゼフ・ナグル Josef Nagl 氏が運営してきました。ナグル氏は、情熱と熱意をもって、創設者の精神に忠実でありながら、博物館の活性化と現代化のために尽力してきました。2015 年には、同博物館に連動したピース・トレイル peace trail も開設しました。約 10 万ユーロのリニューアル・プロジェクトのために EU に補助金を申請しましたが、全体予算の 30～40%と見積もられる分担金を地元自治体が拠出できなかったため、最終的には不成功に終わってしまいました。現在のパンデミックに伴う財政負担を考えると、地元自治体が再び取り組む可能性は低いと思われます。博物館（文化の家 House of Culture / Kulturhaus にある）とピース・トレイルは、2023 年に開催される同地方の庭園ショーgarden show に向けて準備を進めてきた町の当初の計画に組み込まれていました。博物館は 2018 年から閉鎖していますが、再び開館できる可能性は低いようです。シュタットシュライニング Stadtschlaining のヨーロッパ平和博物館 European Peace Museum の閉鎖（2020 年 6 月の INMP ニュースレターNo.31 の 9～10 頁参照）に続き、この国の地味ながらも、刺激的で先駆的な平和博物館が失われることは、非常に残念です。

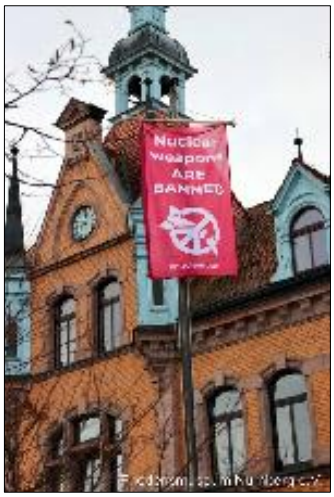
ニュルンベルク平和博物館が核兵器禁止条約発効を祝う

ドイツのニュルンベルク平和博物館 Friedensmuseum Nürnberg は、1 月 22 日、国連の核兵器禁止条約（核禁止条約、2017 年に締結）の発効を祝いました。

ニュルンベルク平和博物館のエルケ・ヴィンター氏とヴォルフガング・ニック氏

博物館の外には、「核兵器が禁止される Nuclear weapons are banned」というバナーが掲げられました。また市内外に住む平和の仲間たちも自宅や窓辺にバナーを掲げました。23 枚の画像（いくつかは博物館の外で撮影）の写真ギャラリーはこちらでご覧いただけます。

また、博物館の共同経営者であるウォルフガング・ニック Wolfgang Nick 氏によるこの条約に関する講演は、こちらから見ることができます。

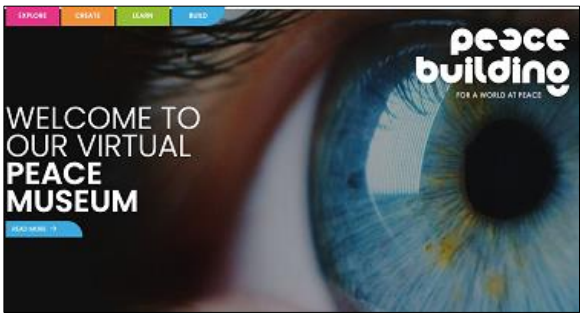


レーテンバッハの市庁舎に掲げられたバナー、ニュルンベルク近郊

ロンドンでバーチャル平和博物館と平和構築プロジェクト

いくつかの平和博物館が閉鎖される一方で、新しいプロジェクトが各地で立ち上がっています。これらのプロジェクトは、何らかの理由で活動を続けることができなくなった先駆的な博物館に触発されたものです。平和博物館の盛衰の要因には、設立者と運営資金にあります。この 2 つは密接に結びついていることが多く、最近閉館したオーストリアの 2 つの博物館もそうです（前述の通り）。ヴォルフスゼック Wolfsegg の平和博物館（最初のオーストリア平和博物館 The First Austrian Peace Museum）とシュタットシュライニング Stadtschlaining のヨーロッパ平和博物館 European Peace Museum は、それぞれの創設者であるフランツ・ドイッチェ Franz Deutsch とゲラルド・マーダー博士 Dr. Gerald Mader のビジョン・情熱・意志の強さと同時に、個人的な資金援助によって創設され、数十年にわたり順調に運営することができたのです。ロンドンに「平和構築／平和博物館 Peace Building / Peace Museum」を建設するという意欲的な計画は、英国ブラッドフォードの平和博物館と INMP の活動に触発されたものです。

「平和構築」は、若い世代の希望の光となり、彼らが直面する課題に立ち向かうために必要な精神的、感情的なツールを提供するものです。平和への総合的かつ積極的なアプローチを推進し、内なる平和、平和的な人間関係、平和的な地域社会、そして平和な世界を構築する方法を探ります。展示では、平和運動、平和のために活動している人々、平和的な学校などを紹介し、世界各地での平和構築の成功例が来場者を刺激し、世界的な平和の文化の構築に向けた取り組みへの参加を呼びかけることになるでしょう。「平和構築」は、戦争や暴力は避けられないものではなく、紛争は対話・交渉・和解－それらのスキルは誰もが学び、実践していくことができる—によって平和的に解決できるという信念のもと、すべての人を教育し、平和構築の担い手を何世代にもわたって育成することを目的としています。



「平和構築」を支えるインスピレーションと原動力であるアンナ・ルベルスカ Anna Lubelska は、第二次世界大戦とホロコーストを生き延びたポーランド人を両親に持ち、英国で育ちました。彼女は、地方自治体やコミュニティでの、特に子供の教育や福利厚生に関する仕事を多くしてきました。彼女はまた、“平和的な学校運動 Peaceful Schools Movement”の創設者であり、『*平和的な学校になるための方法 How*

to be a peaceful school: practical ideas, stories and inspiration』(2018 年）の編集もしています。この本は、学校の内外での生徒や教師の幸福度や福祉を改善し、いじめと闘い、平和を促進するための実践的な方法を示しているすばらしいガイドです。「平和構築／平和博物館」は、平和教育における彼女の長いキャリアから自然に生まれたものと言えます。

アンナ・ルベルスカ（「平和構築」の発起人）、ロンドン

「平和構築」は、ロンドンの新たなランドマークとして、ロンドン初の平和博物館と平和教育センターになることでしょう。現在、10 年後までに実際の建物の着工を計画しています。戦争博物館はあっても、平和博物館がないこの都市で、このようなセンターの必要性を認識してもらうことと、資金調達が当面の課題です。賛同者の皆さんには、ご自身の名前で、あるいは愛する方々を偲んで、バーチャルなレンガを購入していただき、博物館建設への道のりにご参加頂ければと思います。また、2 月にオープンした「平和構築」のバーチャル・ミュージアムと教育センターは、こちらからご覧下さい。

ハーグでの大火災：実現危ぶまれる平和ミュージアム

ニュースレターで以前に伝えましたが、一人の市民が、ハーグ平和宮に関する膨大な工芸品を収集していました。INMP のメンバーのヴィンセント・スティトラー Vincent Stittelaar 氏です(2015 年 5 月の INMP ニュースレターNo.11 の 16 頁参照)。その貴重なコレクションは、1913 年の開幕から今日まで、民衆文化の象徴的建物である平和宮の力を証明するものです。平和宮 100 周年の 2013 年、ヴィンセント氏はバーチャルの平和宮ミュージアムを公開しました。美しく、確実に評判になるだろう、実際のミュージアムを予見させるものでしたのです。彼が考案・作成した新しい記念品（お土産）についてはお知らせしましたが、有名な建物の形をしたチョコレートでした。「国際平和と正義の首都」を訪れる多くの人たちに、平和の認識と促進を高めてもらうためのものです。その時の記事のタイトルは「peace is sweet (平和は甘い)」でしたが、「peace is bitter (平和は苦い)」となってしまう、悲しい出来事が起きてしまいました。

平和宮の前で、純銀製の模型(1913 年)を持つヴィンセント氏(2020 年 1 月)
(Photo credit: Frank Jansen)

引越しの準備のために、ヴィンセント氏は、1000 以上の収集品 — 花瓶・皿・カップ・テーブルウェア・絵画・ポスター・印刷物・写真・珍しい文書や本 —を、一時的に倉庫に移していました。不運で残酷なことに、2020 年の大晦日、大火でそれらがすべて灰になってしまったのです。その収集品には、平和宮や二回のハーグ平和会議 Hague Peace Conference (1899, 1907 年)に関わるもの、そしてハーグの名を冠した古い商品などが含まれていました。後者は「ハーグ平和と正義ミュージアム Hague Museum of Peace and Justice」という彼の夢を飾る物でした。約 15 年間、根気よく愛を込めて集めてきたものが、猛火で数時間のうちに全てなくなってしまったのです。彼や平和宮、ハーグ市にとって、そして世界にとって、重要な芸術・文化遺産の喪失は計り知れないものです。

2020 年元旦の大火(Photo credit: Omroep West)

多くの国が、国際平和と正義を求め、美しく感動的な世界的象徴になることを願って、平和宮の建設に協力し、その内部を飾る貴重な作品に寄贈してきました。新しい建物に投資された望みは、現代の財産であり、多様性に満ちた記念となるものでした。「ハーグ平和と正義ミュージアム」は、平和宮を補完し、目的と趣意を強固にするものだったのです。

この種のミュージアムの必要性は長期間、市当局でも認識され、議論されてきました。しかし最近、財政的理由で諦めることに決まりました。突然の悪夢に変わってしまったヴィンセント氏の夢のためにも、市の支援が望まれます。

残されたヴァーチャル・ミュージアムは、ここで見ることができます。純銀の無比で貴重なミニチュア平和宮など、ヴィンセント氏が保管していた一握りの品もあります。大火の様子も（3 分間フィルムなど）ここから見ることができます。

ジョン･レノン＆オノ･ヨーコの「イマジン」の 50 周年

オノ・ヨーコが構想と歌詞を提供した、ジョン・レノンの「*Imagine イマジン*」は平和の賛歌であり、世界的に有名で、愛されている曲です。1971 年 9 月 9 日に発表されたこの曲は、元ビートルズのメンバーの最高傑作で最も売れた曲として広く知られており、2017 年にはアメリカの全米音楽出版社協会によって「今世紀の歌」に選ばれました。この曲の 50 周年は、世界各地で、若者から年配の人々まで様々な年代の平和を願う人々によって祝われることでしょう。

より良い世界の構想を描くという考えは、行動を起こすための第一歩となります。人間の進歩の歴史における想像力（と理想）が果たしてきた役割は様々な文書に残されています。植民地主義・帝国主義・軍国主義・家父長制・人種差別・奴隷制などの社会制度や慣習がない世界を想像することは、伝統を断ち切り、やがては実を結ぶであろう個人と社会両方のための社会の進歩の過程へ踏み出すための第一歩となるのです。

20 世紀後半、平和研究者・教育者として活躍したエリース＆ケネス・ボールディング Elise & Kenneth Boulding 夫妻の業績に見られるように、平和研究と未来研究の分野が結びついているのは全く偶然ではないのです。未来学者のフレッド・ポラック Fred Polak に触発されて、ボールディング夫妻は、『*The future: imagines and processes 未来：イメージと過程*』（1994 年）を執筆しました。

ストロベリー・フィールズ庭園
（写真提供：セントラル・パーク公式サイト）

ジョン・レノンが住んでいた 2 つの都市、リバプールとニューヨークには、「イマジン」の世界を表現した場所があります。

リバプールのジョン・レノン空港（2001 年に英国で初めて個人の名前を冠した空港）では、以前は「above us, only sky 私たちの上には空だけ」という「イマジン」の歌詞の一部がキャッチフレーズとして頻繁に使われていましたが、現在は以前ほど使われていません。なお、空港の屋根にこの歌詞が書かれていると言われることがありますが、事実ではありません。

ニューヨークのセントラル・パークには、ストロベリー・フィールズ（ジョン・レノンの故郷の戦争孤児院ストロベリー・フィールドが歌詞に含まれている「*Strawberry Fields Forever*」というビートルズ時代のジョン・レノンの曲から名付けられている）という 2.5 エーカー（約 10117.5 ㎡）の広さのジョン・レノンを記念するために作られた庭園があり、その中心部には「イマジン」という言葉を中心にしたモザイクとなっています。これは、オノ・ヨーコの提案で造られた平和庭園で、1985 年に完成しました。この庭園は黙想と想像のための静かな場所として利用されることを意図して造られています。ニューヨークにあるジョン・レノンのストロベリー・フィールズと「イマジン」のモザイクついての物語は、こちら　とこちらをご覧ください。

ニューヨークのセントラルパーク内の
ストロベリー・フィールズ庭園の中心にある
「イマジン」記念碑
（写真提供: セントラル・パーク公式サイト）

曲の詳細（曲の録音を含む）については、こちらとこちらと こちらをご覧ください。ジョン・レノンの関連曲については、こちらのリンクとこちらをご覧ください。

平和のシンボル＆ピース･トレイル

何世紀にもわたって、さまざまな文化や文明が、平和という普遍的な理想をさまざまなシンボルで表現してきました。それらの平和のシンボルによる平和の視覚化のストーリーは、平和博物館の展示を魅力的で

色彩豊かにしています。古代から現代までの多くの平和のシンボルのすばらしい説明・描写はこちらからご覧ください。例えば、オリーブの枝・鳩・壊れたライフル銃・虹色の旗・折り鶴・V サイン・平和の鐘・白いポピーの花・核軍縮のシンボルなどがあります。核軍縮のシンボルは、世界的に平和のシンボルとして知られていますが、もともとは 1950 年代に英国の核軍縮キャンペーン（CND：Campaign for Nuclear Disarmament）のためにデザインされたものでした。デザインのオリジナルは、ブラッドフォードの平和博物館ではなく、ブラッドフォード大学 University of Bradford の J.B.プリーストリー図書館 J.B. Priestley Library の特別コレクションに所蔵されています。（こちらを参照）。

「マンチェスター・シティセンター・ピース・トレイル Manchester City Centre Peace Trail」は、都市マンチェスターや英国国内、そして世界の平和と社会正義を促進した人々や思想、運動にゆかりのある場所を辿れます。18 世紀から 19 世紀にかけて、新しい綿花工場で働く人々が集った世界最初の工業都市マンチェスターでは、社会正義と平和を求める多くの活動や運動が行われました。そのうちのいくつかはマンチェスターのピープルズ・ヒストリー・ミュージアム（民衆の歴史博物館）People's History Museum で紹介されています。この博物館は現在の建物ができて 10 周年を迎えました。1975 年に「国立労働者の歴史博物館 National Museum of Labour History」として開館したこの博物館は、現在「国立民主主義の博物館 the national museum of democracy」自ら称しています(詳細はこちらをご覧ください）。

イタリアのバルコニーに掲げられた国際平和の旗（虹色）（Wikiwand）

マンチェスター・シティセンター・ピース・トレイルは、マンチェスター市議会が、地元の平和団体で構成された小規模な運営委員会を通じて整備したものです。また、ヒストリック・イングランド Historic England（イングランド歴史的建造物・記念物委員会）の助成により、「子どもためのピース・トレイル Children's Peace Trail」も整備されました。ピース・トレイルはこちらからダウンロードできます。詳細はこちらをご覧ください。

『*ロンドン・ピース・トレイル London Peace Trail*（こちら）』の著者ヴァレリー・フレッサーティ Valerie Flessati 氏による、町や都市のための「*ピース・トレイルの作り方 How to create peace trail*」を紹介した 20 分のビデオが、戦争廃止運動（MAW: Movement for Abolition of War）のウェブ・サイトで公開されています（こちら）。このビデオは、MAW と核軍縮キャンペーン（CND）ロンドン支部の協力で制作されました。

アンドレアス・ラッコオの墓と記念碑が存続の危機

アンドレアス・ラッコオ Andreas Latzko（1876～1943 年）はオーストリア＝ハンガリー帝国の作家で、第一次世界大戦での体験から熱烈な戦争反対論者となりました。イタリア戦線での重砲による深刻なショックにより入院加療中に『*戦いの人々Men in War*』（1918 年）の執筆を開始し、ドイツ語版（『*Menschen im Krieg*』）は、1917 年にチューリッヒにて匿名で出版されました。

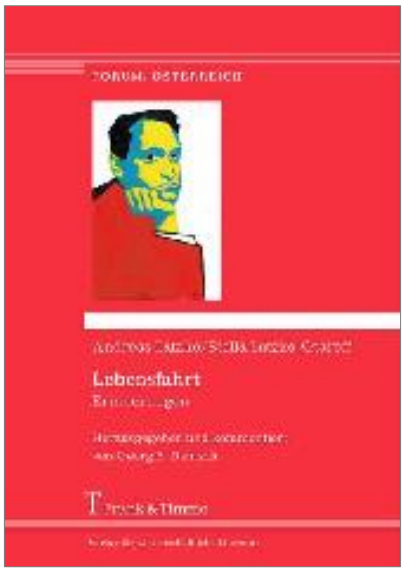
ポーランドの有名グラフィックデザイナー、ミエチスワフ・ベルマン Mieczyslaw Berman（1903～1975 年）のフォトモンタージュが施された『戦いの人々Men in War』のポーランド語版（1931 年）

『*戦いの人々 Men in War*』は 19 カ国語で出版され、ベストセラーになりましたが、戦争に参加したすべての国で出版が禁止され、世界的に有名になった著者は降格、さらには軍を解雇されました。1918 年、彼は『*The Judgment of Peace(平和の判断)*』と『*The Wild Man (野蛮な人)*』という 2 つの小説を書きました。1918 年 4 月には、ベルンで開催された「国際理解のための国際女性会議 Internationale Frauenkonferenz für Völkerverständigung」で講演し、その講演の内容が『*Frauen im Krieg（戦争の中の女性たち）*』として同年に出版されました。ラッコオは、アンリ・バルビュス Henri Barbusse、ハインリヒ・マン Heinrich Mann, and、ゲオルク・フリードリッヒ・ニコライ Georg F. Nicolai、ロマン・ロラン Romain Rolland、シュテファン・ツヴァイク Stefan Zweig などの作家仲間や移民、反戦主義者たちと交流がありました。

第一次世界大戦後ミュンヘンに移ったものの、グスタフ・ランダウアー Gustav Landauer が中心となって樹立されたバイエルン・レーテ共和国を支持したため、バイエルンから追放されました。その後、ザルツブルクに住み、1931 年にはアムステルダムに移って、執筆と出版を続けました。

アンドレアス・ラッコオとステラ・ラッコオ・オタロフの墓

彼は 1943 年に亡くなりましたが、その 10 年前にナチスは彼の本の焼却を命じていました。妻のステラ・ラッコオ・オタロフ Stella Latzko-Otaroff（1965 年死去）とともに、アムステルダムの Zorgvlied 墓地に埋葬されています。彼らの墓と記念碑は、今年末に撤去される危険があります。



ゲオルク・B・ドイチュ Georg B. Deutsch 氏編集による 2017 年版書籍の表紙

これは、アムステルダム市が、今後 10 年間の墓と記念碑の維持管理費用（1600 ユーロ）を支払わないと決定したためです。残念なことに、最近、ラッコオの近親者も亡くなってしまいました。ラッコオに関する重要な新著（ドイツ語）の編集者であるゲオルク・B・ドイチェ Georg B. Deutsch 氏は、この決定について異議申し立てを行っています。ドイチェ氏の連絡先は以下の通りです。

georg.deutsch@gmail.com

安斎育郎教授がユネスコ・クラブ・ウィーンの「地球市民賞」を受賞

3 月 11 日、安斎育郎教授へユネスコ・クラブ・ウィーン（UCV:UNESCO Club Vienna）地球市民賞が授与されました。この賞は、UCV のプログラム・ディレクターであり、UCV 地球市民プラットフォームの創設者であるフラン・イブ・ライト Fran Eve Wright 氏の発案により、UCV が授与したものです。

UCV は、世界ユネスコ協会クラブ・センター連盟（WFUCA：World Federation of UNESCO Clubs, Centres and Associations）の加盟団体で、INMP と同様、国連経済社会理事会（ECOSOC）の協議資格を有する NGO です。フラン・ライト氏は、INMP のメンバーであり、2020 年に開催された第 10 回国際平和博物館会議で「*Sharing experience across borders 国境を越えて経験を共有する*」と題した発表（動画）をおこないました。
https://sites.google.com/view/inmp-2020/p201sharing-experience-across-borders」

この発表では、文化や文明の対話に向けたユネスコの博物館学的・教育学的アプローチの概要や、オーストリアと日本における平和教育の取り組みが紹介されています。

今回の賞では、安斎教授の「放射線防護を専門とする平和研究者・核科学者」「平和のための博物館国際ネットワークのシニア・アドバイザーおよび名誉ゼネラル・コーディネーター」という立場を称えたものです。受賞の時期は、「原発悔恨・伝言の碑」の除幕と、福島県の宝鏡寺境内に「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」が開設された時期と重なっています。

安斎教授は四半世紀にわたって INMP の発展に尽力し、特にこの 3 年間はゼネラル・コーディネーターとして、第 10 回国際平和博物館会議のオンライン開催を成功させるとともに、2011 年 3 月 11 日の原発事故後には「福島プロジェクト」を立ち上げ、被災者のためにこれまで 70 回以上も福島を訪れて、調査・相談・学習活動を行なってきました。

震災から10周年を迎えたまさにこの日、原発から 15km 離れた楢葉町にある室町時代以来の古刹・宝鏡寺で 3 つの記念行事が行われました。宝鏡寺の第30代住職である早川篤雄氏は平和主義的な僧侶であり、約半世紀にわたって安斎教授とともに日本の原子力政策を批判してきました。3月 11 日、同寺で「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言の灯」が点火され、早川住職と安斎教授が共同で「原発悔恨・伝言の碑」を建立し、同時に「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を開館しました。

「原発悔恨・伝言の碑」の横に立つ早川宝鏡寺住職（左）と安斎教授
（2021 年 3 月 11 日、宝鏡寺にて）

「悔恨・伝言の碑」には、安斎教授の次のような詩が刻まれています。

> *電力企業と国家の専横に*
> *立ち向かって四〇年　力及ばず*
> *原発は本性を剥き出し*
> *故郷の過去・現在・未来を奪った*
>
> *人々に伝えたい*
> *感性を研ぎ澄まし*
> *知恵をふりしぼり*
> *力を結び合わせ*
> *不条理に立ち向かう勇気を！*
> *科学と命への限りない愛の力で！*

伝言館は、核の脅威のない平和な世界を目指す自由な発信基地として期待される平和博物館であり、福島原発事故の影響を踏まえて、原子力問題に関する情報を積極的に発信していることが特徴です。

安斎教授は、宝鏡寺で行われた授賞式で UCV 地球市民賞を紹介し、この賞が反核平和運動への励ましのメッセージになることを期待していると述べました。

宝鏡寺境内の「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」

伝言館 1 階の展示風景。安斎教授が世界中から集めた 80 枚のお面が天井の梁に展示され、異文化を理解することの大切さを訴えています。

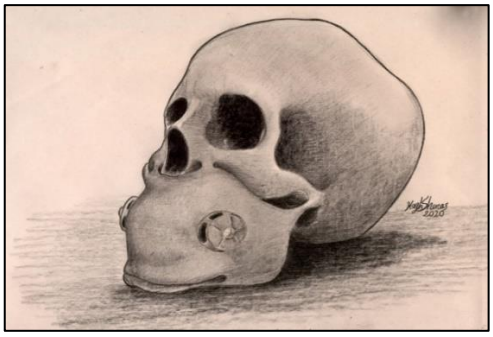
INMP 2020 関連企画「マンガ・パンデミック Web 展」が大成功

INMP 2020 組織委員会は、「マンガ・パンデミック Web 展」を組織するために、立命館

大学・京都精華大学・京都国際マンガミュージアムおよび漫画家のしりあがり寿さん、イラストレーターの安齋肇さんと共同しました。

当初は「平和ボケ漫画展」というテーマのもとで作品募集する予定でしたが、世界に新型コロナ・ウィルス感染症が蔓延する中でテーマが「マンガ・パンデミック Web 展」に切り替えられました。

募集開始とともに様々な国から次々と作品が寄せられ、最終的に 50 か国以上の 345 人から 1041 点の作品が寄せられました。多くの人々が閲覧して評判が良かったために、実行委員会は 2020 年 12 月 25 日までの会期を 2021 年 1 月 31 日までと延長しました。30 人以上の応募があった国は、日本・イラン・中国で、5 人以上の応募があった国は、フランス・ウクライナ・インド・インドネシア・トルコ・ポーランド・アルジェリア・ロシアなどで、INMP が新たな関係を開拓することに貢献しました。



モハンマドレサ・ハーシェナス/イラン

ジョルジュ・ポロシキ/日本

ここで紹介する作品 2 点を選択することは非常に難しいことでしたが、作品 1 は新型コロナ・ウィルス感染症時代を生き抜いた人類の進化の果てを示唆した作品で、作品 2 は Covid 19 が流行する社会での強盗と被害者の関係を象徴しています。

実行委員会は 2021 年 1 月 29 日、ズームでのシンポジウムを開催し、「マンガ・パンデミック Web 展」の応募状況や特徴について紹介するとともに、応募作品についてそれぞれの実行委員がお気に入りの作品を紹介し合い、興味深い意見交換を行いました。

このウェブ展が多くの参加者を得て成功裏に行なわれた事実を踏まえ、実行委員会は来年度以降も引き続き展示会を開催する方向で検討することとしました。

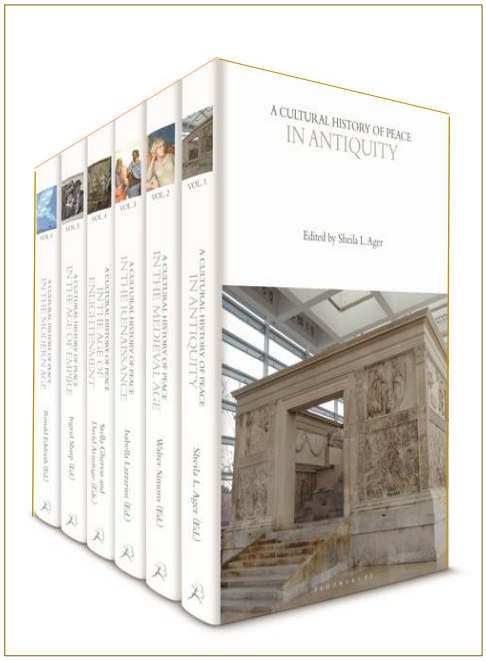
「マンガ・パンデミック Web 展」をご覧になりたい方はこちらをクリックして下さい。　　*(安斎育郎)*

新刊案内

『A Cultural History of Peace (6 volumes) 平和の文化史（全 6 巻）』Series editor, Ronald Edsforth ロナルド・エズフォース編集総括（London ロンドン: Bloomsbury ブルームズベリー社、2020 年）

平和の歴史は過小評価されています。もっと学術的に注目される必要があります。「平和」を、意識の主流の一部、人々の思考様式の一部にする必要があるのです。したがって、平和の「文化史」をまとめた 6 巻の論集の出版は大変歓迎されるべきものです（それが主に西洋の文化史であっても）。

人類学者、政治哲学者、社会史家など幅広い分野の学者は、これまで「平和」について熟考しなくてもすんだかもしれませんが、このシリーズの執筆に当たっては、平和に焦点を当ててそれぞれの専門分野を再構築しました。このように、平和の研究、特に平和の歴史の研究が広がったことは、この論集の大きな成果のひとつです。



各巻では、1 巻から順に、古代、中世、ルネッサンス、啓蒙の時代、帝国の時代、近代というように様々な歴史的時代を取り上げています。このシリーズには、独創的な構造があります。各巻は、以下のような同じ章立てで構成されているのです。「序論」「平和の定義」「人間の本質：平和と戦争」「平和・戦争とジェンダー」「平和・平和主義と宗教」「平和の表現」「平和運動」「平和・安全保障と抑止力」「統合としての平和」。

つまり、この論集は横断的に読むことができるのです。例えば、「平和・戦争とジェンダー」に関する各巻の当該の章を読むことで、そのテーマの歴的研究を知ることができるのです。各巻ごとに編集者が異なっており、それぞれの編集者の「序論」の章を全巻連続して読むことで、西洋史における平和に関する思考と実践を概観できるという見事な構成になっています。

実は、私自身、1815 年から 1920 年の巻で「平和・平和主義と宗教」の章を執筆したという個人的な関わりがあります。

全 6 巻あっても、このシリーズで平和の文化史を完全に網羅できているわけではありません。初期キリスト教会の神学者の平和主義、ヴァルド派（12 世紀末にフランスのヴァルドが清貧な使途的生活を説いて創始し、カトリックに迫害されたが現在まで続くヨーロッパのキリスト教プロテスタントの一派）の非暴力、カタリ派（12～13 世紀にフランス・イタリアで広まったがカトリックに弾圧されて消滅したキリスト教の禁欲主義的な一派）の‘perfecti’と呼ばれた僧たちについては、もっと記述があるとよかったと思います。14 世紀のイギリス国教会の詩人が書いた反戦についての作品は触れられていませんし、エラスムスについての記述も十分ではありません。しかし、参考文献と文献リストは大変よくできています。

難点は価格です。約 450 ドルと高額で、ほとんどの人にとって手に入りやすい価格とは言えません。

しかしこのシリーズは、すべての大学の図書館や平和博物館の資料室に置かれるべ

きものです。平和のための博物館に携わっている私たちにとっては、「平和の表現」の章が参考になることが多いでしょう。この章や他の章でも、美術品や工芸品が論じられ、時にはど のような作品かが描写されています。私はこの本から新しい展示の着想を得ることができました。この書籍には、展示を企画する際に役立つ優れた背景資料も含まれています。

Clive Barrett クライヴ・バレット
ブラッドフォード平和博物館
評議員会議長

Dr. Sultan Somjee (スルタン-ソムジー)
『One who dreams is called a prophet
夢を見る者は預言者と呼ばれる』

コミュニティ平和博物館ヘリテージ財団の創設者であるスルタン・ソムジー博士（2020 年 6 月の INMP ニュースレター No.31 の 16 頁および 2020 年 12 月の No.33 の 16 頁参照）によるこの新しい小説が最近、キンバリー・ベイカー氏の書評で紹介されました。ベイカー氏は、ケニアでの現地調査で、携帯していたこの本で述べられているソムジー博士の洞察力と方法論的手法に導かれたと、興味深く語っています。このレビューは、*Awaaz* 誌（ナイロビ）Vol.17, No3(2020 年 12 月発行)に掲載されました。このリンクから読むことができます。

Eric Margolis エリック・マーゴリス
「Anne Frank and Sadako Sasaki: Two girls that symbolize the horrors of war
アンネ・フランクと佐々木禎子：戦争の恐怖を象徴する二人の少女」

ジャパンタイムズの 2020 年 12 月 28 日号に、上記のタイトルのエリック・マーゴリス Eric Margolis による興味深い長文記事が掲載されました。

今から 60 年近く前の 1962 年 1 月、一年前に広島を出発して、世間からほとんど忘れられていた大陸横断平和行進がアウシュビッツに到着したことを著者は回想しています。この平和行進は、広島・長崎への原爆投下とホロコーストという、第二次世界大戦における二つの大きな悲劇を結びつけるものでした。

それは、佐々木禎子とアンネ・フランクという戦争によって人生を引き裂かれ、若くして亡くなってしまった 2 人の少女の物語を結び合わせることによって実現しました。この 2 人の物語は、戦争の惨状を子どもにもわかりやすく伝える強力なシンボルとなり、日本の文化の精神に大きな影響を与え続けています。

また、広島県福山市にあるホロコースト記念館や福島県白河市にあるアウシュビッツ平和博物館の意義についても論じています。記事の全文はこちらからご覧いただけます。

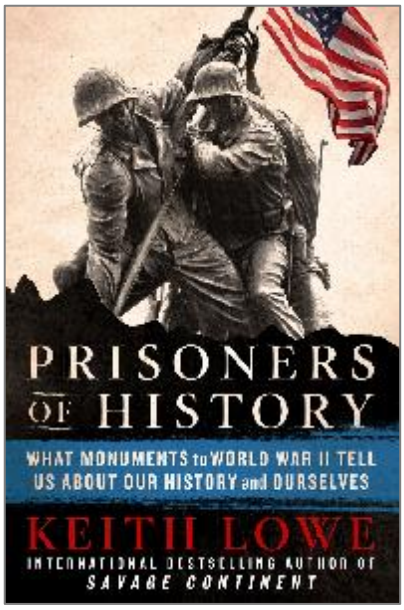
（写真提供：ジャパンタイムズ）

Keith Lowe キース・ロウ
***『Prisoners of history: What monuments to World War II tell us about our history and ourselves* 歴史の囚人：第二次世界大戦の記念碑が私たちの歴史と私たち自身について伝えること』（St. Martin's Press セント・マーティンズプレス社、2020**

戦後 75 周年に出版されたこの本で著者は、中国の侵華日軍南京大虐殺遭難同胞紀念館、

広島の原爆ドーム、エルサレムにあるヤド・ヴァシェム（ホロコーストの犠牲者を追悼するための国立博物館）、ロシアのヴォルゴグラードにある「母なる祖国像」（第二次大戦中のスターリングラード攻防戦を記念して建てられた巨像）など、25 の記念碑・記念館に焦点を当て、当然のことながら、国によって戦争の捉え方が異なっていることを指摘しています。例えば、米国で建てられた記念碑は勝利や英雄に捧げられているものが多いのに対し、ヨーロッパの国々では悲劇的な事件や犠牲者に捧げられているものが多いということです。

筆者の洞察に満ちた説明は、歴史・美術評論・旅行記が一体となっています。より詳しい情報についてはこちらをご覧ください。



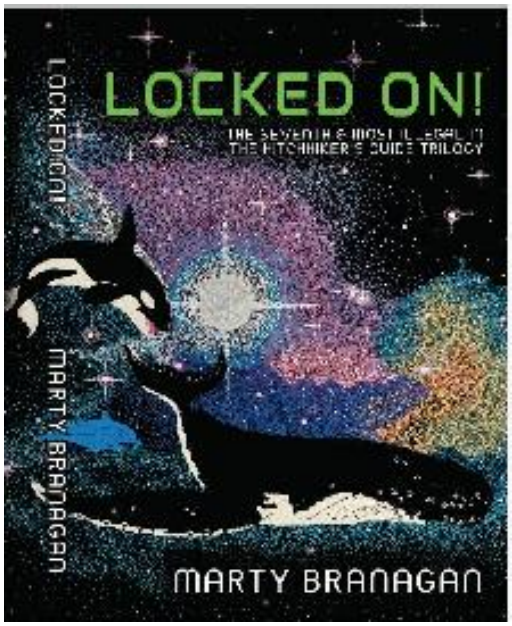
また、著者は、論争となっている東京の靖国神社に関して、「*The Tokyo shrine that will never find peace: What's left to salvage in monument that refuses to accept the sins of the past 決して平和を見つけることのできない東京の神社：過去の罪を受け入れようとしない記念碑には、救済のために何が残されているのか*」という優れた小論も書いています。

著者は、「過去の罪がここでは認められないままなのに、日本の近隣諸国が過去を置き去りにできる見込みはない」と結論づけています。1 月に出版されたこの小論は、このリンクから読むことができます。靖国神社の建物や記念碑、歴史的行事などを紹介したフォトギャラリーはこちらにあります。

Dr. Marty Branagan
マーティ・ブラナガン博士の著書

マーティ・ブラナガン博士は、オーストラリアのニューイングランド大学 University of New England（ニューサウスウェールズ州アーミデール Armidale）で平和学の Senior Lecturer を務めており、「積極的抵抗：現代の非暴力」などのコースを担当しています。また、この講座のために毎年恒例の「*非暴力映画祭 Nonviolence Film Festival*（時には平和に関する展示も同時に）」を開催しています。また、非暴力行動主義に関する参加観察者方法での調査を長年行っています。他にも、「平和の文化創造」や「環境の平和」などの講座も担当しています。また、環境擁護の新しい修士課程の創設にも尽力しました。

最新作の小説『*Locked On!ロック・オン！*』は、実際の環境保護のための封鎖事件を基にして、ユーモラスな空想科学的で、宇宙を舞台に企業の強欲さ・腐敗した政府・環境破壊・戦争・地球温暖化などに抵抗するため非暴力市民的不服従センターへ向かうとても陽気な旅を描いています。この小説が示す、非暴力行動の可能性についての洞察は、希望とインスピレーションをもたらします。この小説は傑作であり、非常に面白いと評されています。詳しくはこちらをご覧ください。また、こちらとこちらもご覧ください。



※以下は新刊ではありませんが、
興味深い出版物です

(a) Laura Kate Gibson ローラ・ケイト・ギブソンによる「*Seeking common ground: how digital museums might play a role in promoting peace 共通の基盤を求めて：デジタル博物館はいかにして平和を促進する役割を果たすか*」と、Gregor H. Lersch グレゴール・H・レルシュによる「*Can museums and art exhibitions play an active part in the process of reconciliation? 博物館や美術展は和解の過程で積極的な役割を果たすことができるか？*」という小論が『*Museums and the Idea of Historical Progress 博物館と歴史的進歩の認識*』（2014 年、それぞれ 165-174 頁と 239-256 頁）という書籍に掲載されています。この本はこちらから無料でダウンロードできます。

(b) Gustav Wollentz グスタフ・ウォレンツ『*The cultural heritage as a resource in conflict resolution 紛争解決における方策としての文化遺産*』（2014 年）はこちらで入手可能です。INMP について 35 頁で言及しています。

(c) 『*MeLa: European museums in an age of migrations 移住の時代におけるヨーロッパの博物館*』は 21 世紀のヨーロッパにおける博物館の役割についての 4 年に渡る(2011-2015 年)研究プロジェクトの最終報告です。このプロジェクトは EU から資金援助を受けて行われました。この報告はこちらで読むことができます。

(d) EUNAMUS: European National Museums 欧州国立博物館 は、EU から 3 年間の資金提供を受けた『*European National Museums: Identity politics, the uses of the past and the European citizen European National Museums: Identity politics 欧州国立博物館：アイデンティティ・ポリティクス、過去の利用と欧州市民*』の研究プロジェクトを行いました。（アイデンティティ・ポリティクスとは、主に人種や宗教、民族、ジェンダー等で特定の自己認識に基づいた集団の利益を代弁して行う政治的主張・活動のことです）。このプロジェクトは研究成果として多数の報告書が出版されています。それらはこちらのリンクに紹介されています。

(e) 『*History and belonging : representations of the past in contemporary European politics 歴史と所有物：現代ヨーロッパの政治における過去の描写*』(2018 年) という書籍の中に、Daniel Rosenberg ダニエル・ローゼンバーグ による「Exhibiting post-national identity: The House of European History 国民の後のアイデンティティの展示：欧州歴史館」という題の章があり、こちらのリンクから無料でダウンロードできます。

(f)もう一つ、欧州歴史館に関する Veronika Settele ヴェロニカ・セッテレによる記事があります。「Including exclusion in European memory? Politics of remembrance at the House of European History ヨーロッパ人の記憶に排除を含める？欧州歴史館での追悼の政治」(2015 年) はこちらのリンクにあります。

編集後記

この通信は、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根和代、安斎育郎、キヤ・キム、小島健太郎によって編集されました。また日本語版の翻訳は、赤松敦子さん、大塚未希さん、寺田京子さん、山本美穂子さんが担当しました。この通信は、INMP の個人と組織をつなぐ重要な場です。また INMP の会員ではない方が世界の平和博物館の活動を知る上で、大変重要です。

以前発行された通信は **INMP のウェブサイトで読むことができます。**

http://tinyurl.com/INMPMuseumsForPeace/

INMP の通信は年に 4 回発行されますが、定期的に読みたい方は、メールアドレスを次のメールにお知らせ下さい。inmpoffice@gmail.com

2021 年 6 月に発行される次号に投稿したい方は、2021 年 5 月 15 日までに原稿をお願いします（英文で 500 語以内、日本語の場合 1000 字以内、写真 1-2 枚）。直接英語による原稿を書くことに困難がある場合には、以下の INMP 日本事務局にご相談ください。

inmpoffice@gmail.com

年会費　2,000 円
※送金先：INMP 郵便局振込用口座
記号 14480 番号 49799181
名前 アイエヌエムピー
他金融機関からの振込の場合
店名 四四八（ヨンヨンハチ） 店番 448 普通預金 口座番号 4979918

INMP の新しい体制について

INMP は、2020 年の理事選挙で選出された新しいガバナンスチームのもと、生まれ変わろうとしています。ガバナンスチームは、イラッチェ・モモイシオ（スペイン）、乗松聡子（カナダ）、君島東彦（日本）の 3 人のコーディネーターによるトロイカ体制で運営されており、上意下達的な運営ではなく、理事、諮問委員会メンバー、会員による水平的・協調的な運営によって、ネットワークの活動を活性化させようとしています。ガバナンスチームは、近々、ネットワークの活動方針を発表する予定です。

INMP の事務局は、引き続き立命館大学国際平和ミュージアム（日本・京都）に置かれ、会員名簿の管理や会費などの財務管理を行います。ネットワークメンバーは、2021 年分の会費を INMP に確実に支払うことが期待されます。

第 10 回大会の共催者である立命館大学、京都芸術大学、京都精華大学、池坊短期大学の素晴らしい協力のおかげで、ネットワークにはたくさんの国から数多くの参加者が集まっただけでなく、2021 年度には 150 万円（14,000 米ドル）を一般会計に繰り入れるという財務上の成果を上げることができました。

2022 年、INMP は 1992 年の設立から 30 周年を迎えますが、今後も世界の 300 近い平和博物館との連携を深め、ネットワークの影響力をさらに拡大していくことが強く期待されています。

平和博物館との連携を深め、ネットワークの影響力をさらに拡大していくことが強く期待されています。

【日本語版特報】

花盛りの京都府宇治市平和像

安斎育郎

編集者の習性というべきでしょうか、悩ましさというべきでしょうか、それとも特権というべきでしょうか、スペースが余ると何かの記事で埋めるべきかどうかと考えます。新型コロナウイルス感染症の蔓延で屋内作業が多くなっている今、たまたま散歩で宇治市役所前を通りかかると、「平和の像」の前の花壇が春の花々に彩られていました。つい嬉しくなって写真をパチリ。INMP の日本会員の皆さんにもお届けします。近くには広島・長崎・那覇の被爆石・戦災石も展示されています。